

全障研しんぶん

2025年10月25日発行

発行所 全国障害者問題研究会

〒162 東京都新宿区山吹町 4-7

-0801 新宿山吹町ビル 5階

TEL 03-6265-0193 FAX 03-6265-0194

<https://www.nginet.or.jp/>

編集発行人 櫻井宏明

定価 200円



600



全国大会の写真はいずれも吉田亮人さん撮影

全障研59回全国大会(広島2025)

戦後80年・被爆80年の大会に1500人参加

被爆80年、戦後80年の今年、

全障研は8月9日、10日に広島で第59回全国大会を開催しました。大会のテーマは「つながろう つなげよう みんなのねがい かがやかせよう みんなのいのち へいわのわ えがおのわ」。ボランティアを含めて約1500人(うち録画配信視聴約270人)の参加がありました。

1日目の全体会場は平和公園に建つ広島国際会議場で、この日は奇しくも長崎に原子爆弾が投下された日です。

オープニングでは亀山子供神楽の迫力ある「八岐大蛇」が参加者を迎えてくれました。最初に主催者である越野和之全障研全国委員長と高橋実大会準備委員長からあいさつがありました。次に家平悟障全協事務局長の来賓あいさつ、広島県知事(代理)から

のあいさつと続きました。

その後、深谷弘和常任全国委員による基調報告と障害者自立支援法違憲訴訟(広島)元原告の秋保喜美子さんによる重点報告「基本合意から15年 私の今のくらし」でした。秋保さんは、「2010年に国と基本合意文書を調印、定期協議では改善された成果もあるが基本合意の実現にはまだまだ多くの課題が残っている」、「もつと世代を越えた運動を」と訴えました。

記念講演は、高垣慶太さん(都立第五福竜丸展示館インターンほか)による「平和とは何か——世界のヒバクシャの視点から」でした。広島・長崎の核兵器による被害が長期にわたって様々な影響を被害者に与え続けていることが語られました。また、核兵器を開発、維持するために

たくさんの方の核実験が必要なので、「被爆国」は日本に限らないこと、高垣さんが訪れた核実験地のマーシャル諸島、カザフスタンなどの住民との交流が紹介され、住民は土地を奪われただけでなく、そこでの生活が育てた文化までも奪われていることが語られました。

文化行事(合唱)では、「つながろう つなげよう みんなのねがい」ひとりひとりのねがいをうたにのせてひろしまから〜ということ、それぞれの地域で練習を重ねてきた合唱隊、バンド隊がステージを埋め尽くし、広島県内の仲間や保護者、支援スタッフのみなさんから募集した「ねがい」をもとに生まれた創作曲3曲を含めた5曲の合唱が披露されました。

最後は広島からの映像による平和メッセージが会場スクリーンに映し出されました。大会2日目は会場を広島工業大学専門学校と広島市総合福祉センターに移し、20の分科会と2つの特別分科会、学

学習講座が開催されました。分科会には76本のレポートが寄せられました。

学習講座は、「障害者権利条約、北欧と発達保障」蘭部英夫さん(全障研副委員長・日本障害者協議会副代表)、「発達の煌めきは『みんな』のなかに」発達を学ぶあなたへ」白石正久さん(龍谷大学名誉教授)、「仲間がいっぱいひろしまの療育」いつでもどこでもだれとでも「障害児の母として、支援者として、今思うこと」幸田千代子さん(元療育センター職員)、「療育って楽しい!」編著者)、「彷徨(さまよう居場所)」入所施設削減の陰で」九内康夫さん(全国障害児者の暮らしの場を考える会事務局長)でした。それぞれの講座が響き合うものとなりました。

今大会では、大会に参加する学生や院生などの交流を目的として「わかもの交流会」を企画し、当日は昼食を摂りながら17人が交流しました。加えて、事前・事後にはオン

ラインでの交流を行いました。

現地準備委員会は、準備期間が短く、またコロナ禍を経ても大きく様変わりしたことも多く、準備活動に大きな困難があったと思います。そうした中で、県内からの参加者が約4割だったことが示すように参加組織にも力を入れ、また要員などたくさんの方の力を結集するなど奮闘して、大会を大きく成功させました。来年の第60回全国大会は滋賀で開催します。今年の成果を滋賀へと引き継いでいきたいと思います。

(全国事務局 櫻井宏明)



★いくつかの分科会からの報告です。

第3分科会

保育所等および専門施設における保育・療育の実践
(3)自閉スペクトラム症、発達障害

100名以上の参加があり、保育士や児童発達支援員、発達相談員、保健師など幅広い職種の参加がありました。分科会全体として7本のレポートがあり、レポートの内容から3つの分科会に分かれて討議を進めました。

私が参加した分散会(第2分散会)では、参加者の自己紹介からはじめ、これまで分科会のなかで大切にできた視点などを共有したあと、保育所での実践レポート2本を中心に討議しました。

1つ目のレポートでは滋賀の見勢さんから保育所での集団活動に参加しにくい姿を示すひまわりちゃんにみられた変化と保育者の対応について報告がありました。保育者との



たちへの対応の難しさがあることなどが議論となり、加配対象児を含む「集団づくり」を通して、どの子どもにとってもポジティブ・ネガティブ両側面の経験の積み重ねの重要性が確認されました。

その後はグループに分かれ、学びの共有を行いました。参加者それぞれの立場から活発に意見交換や議論が行われました。2本のレポートの内容は保育所等でインクルーシブ保育を進めるなかで、必ずと言っていいほど生じる実践上の課題であり、ディスカッションを通して学びを深める機会となりました。

信頼関係が形成されるなかで自分の思いを出せるようになることや、集団に入りにくい子どもを「クラスの仲間の一人」として捉えることが大切となることなど、レポート報告と討議のなかで確認されました。

2つ目のレポートでは神奈川の山本さんから保育所での加配対象児を含む「集団づくり」の良さと難しさについて報告がありました。加配対象児にとってお友達と過ごすことに大きなメリットがある一方で、加配対象児が示す行動特徴を受け入れにくい子ども

大雨の影響もあり、30分ほど時間をくり上げて終了となっていました。残念と感じるほど充実したレポート報告、全体討議グループディスカッションとなりました。インクルーシブ保育の楽しさ(やりがい)と難しさを痛感した充実の1日でした。(運営者 狗巻修司)

第6分科会

障害児学級の実践、
交流・共同教育、
障害理解学習

この分科会は第57回(2023年)から、障害児学級分科会(2008年開設)と、交流・共同教育、障害理解学習分科会(1973年開設)の2つが一緒になったものです。

今年は4本のレポートでした。障害児学級の実践(高橋レポート)、交流・共同教育の実践(川合レポート)、自

分理解のレポート(池田・古澤レポート)と分科会の名前通りの実践が揃いました。年齢層も大学生から退職教員まで幅広い約30名の参加でした。また、広島

交流・共同教育が積み上げてきた基調報告を受けてレポ

ートの論議をしました。高橋レポートは自由度が高く自己決定を大切に

した実践でした。また、障害が重い子ども

の成長の姿も語られました。川合レポートは長く続いた交

流・共同教育の丁寧な実践でした。池田レポートは自分の

思いを表現することで自分を見つめる目を育てた実践

でした。古澤レポートは他の人と違う自分を意識して葛藤する

姿を支える実践でした。今、学校は管理や学習指導

要領の締め付けなどが強まり、子どもや教職員が息苦しさを一層感じるようになり

第10分科会

学ぶ、楽しむ、
文化活動

学

青年・成人期における学び

や文化活動等を扱う本分科会は、従来「18歳以降の教育」と「青年学級、文化・スポーツ」に分かれていたものが、

の余暇活動としての文化・スポーツ等の活動など、多彩な実践がこの分科会に集約されています。大きく括れば、青年・成人期の「生涯学習」について扱う形となります。

開始に先立ち、分科会基調として昨年の奈良大会を振り返り、「生涯学習」の視点は青年・成人期に固有なものではなく、ライフステージを越える形で、乳幼児期・学齢期から貫かれている課題であることを再認識するものだったと述べました。今回は7本のレポートが寄せられたため、

昨年同様に分科会全体会を行った後、2つの分散会に分かれてレポート発表を行いました。レポート報告の内容は多彩で、福祉型専攻科におけるス



また、特別支援学校高等部専攻科の卒業生が、卒後の活動として属している青年サークルでの学びを振り返り、学校時代に学べなかった性教育の大切さをレポート報告として語ってくれました。報告を通じて青年自身が学びの意義を語ったり、生き生きとした様子を示してくれたことで、

今回レポート報告を行わなかった京都の障害者青年学級の仲間たちは、来年は自分たちもレポート報告をめざした

いと、全国の青年たちの姿から刺激を受けたようです。

青年・成人期の学びや文化

活動等を支える制度上の課題は決して十分ではないですが、参加した青年たちの姿に学びながら、活動を豊かにしていくためのヒントや情熱を共有できる場になったと思います。(運営者 國本真吾)

第12分科会

障害の重い人の生活と支援

13都道府県からの約30名の参加者と4本のレポートをもとに学びあいました。

「新たな価値を創り出す」シュピールの実践をとおして」では、自然豊かな北海道日高郡新ひだか町で廃校を購入し、30代の発達の1次元形成期(通常の1歳前半)にあると思われる方への実践が報告され、本人の主体性をひきだすことを丁寧に追求して、支援者が「間」を大切に、本人が好きな食事のにおいや準備や音を大切に少しでも期待感を高められるように

することで、食事では意思表示も明確になってきたとのことです。

埼玉・大地「入所施設における『生活リハビリ』について」の報告は、高齢化や職員不足などで特設のリハビリの時間が困難になったことから、仲間の生活のなかでの「ちよつとした動作の積み重ね」を「生活リハビリ」として、職員集団でいねいにとりくむ中で、仲間の動きを待つこと

の大切さとともに多忙な現場の問題をもみつめ直すことになったとのことでした。いずれも「間」が重要なキーワードで、単に時間や距離を意識するということではなく、本人の側から何度も問い直すこと、職員自身も自分のかかわりを見つめ直すこと、職員集団のあり方を問うことであるのだと学びあうことができました。

千葉・生活事業所きざしの報告は、職員研修で改めて、映画『夜明け前の子どもたち』を上映し改めて発達保障について学び直す中で、これまで

見過ごしていた障害の重い人の行動の意味や思いを「これってすごくない」「ヨコへの豊かな発達」などと捉える会話が増えていったとのことでした。

埼玉・太陽の里からは、2年にも及んで買い物に強いこだわりをもつBさんの内面や願いを探るために、亡くなった母との思い出や以前担当していた担当者等への聞き取りを通して、Bさんに寄り添いながら、安心できる向き合う関係づくりを進め、誰と、どこで、何をやるなどBさんともに見通しの力を育む場になっていったことが報告されました。(運営者 細野浩一)

特別分科会2 なかまの分科会

私は、縁あって2日目のなかまの分科会の運営に関わらせてもらいました。

最初に分科会の話を持ってきたのは約1年前。具体的に動き始めたのが半年前。内容に制約はなく、まさにゼロから



のスタートでした。

さて、どうしたものか。見通しが持てない中、仲間から出てきたのは分科会テーマ『戦争は嫌い！平和が大好き！』でした。被爆80年。被爆地ヒロシマ。ウクライナやガザの問題…。「こんな世の中だからこそ、今やらなくちゃ！」そんな平和に対する熱い思いを感じました。

テーマが決まり、次は具体的な中身について。「被団協の人の話を聞きたい!」「みんなで折り鶴を折ったら?」などなど。仲間がアイデアを提案し、形づくっていきました。

当日の目玉企画は、日本被

団協の代表理事をされている田中聡司さんの講演でした。

講演の中で印象に残っている言葉があります。「第三次世界大戦は、もう始まっていると思っています」。田中さんは今の世界情勢を踏まえて話されていました。それは、平和な日本に生きる私にとつて、実感のない言葉。被爆地ヒロシマに生きる人間として、認めたくない言葉だった

一方で、日本が戦争をしていた時代に生まれた田中さんのその言葉はとても重く感じました。私たちが知る平和は、こうした遠く離れたところから崩れていくのかもしれない。自分にも何かできることはないだろうか。80年前にヒロシマで起こった出来事が昔話ではない現実を突きつけられました。

その他には、折り鶴作り体験や歌コーナーなどを企画し、温もりのある分科会になりました。

不安な気持ちでスタートした分科会でしたが、テーマや内容が決まる過程は、とても

刺激的でした。障がいのある方に関わる活動の最前線の一つがここにある! そう思える半年間でした。分科会運営にご協力してくださった皆さん、改めて本当にありがとうございました。私にとっても大きな学びと気づきの場になりました。

『戦争は嫌い! 平和が大好き!』最後に、仲間の考えたこの言葉を添えて、全障研全国大会なかまの分科会の結びとしたいと思います。

(運営者 大迫由貴)

わかもの交流会

全障研常任全国委員会では大会に参加する学生らわかものが「お互いに知り合えるといいなあ」ということで「わかもの交流会」を企画し、川地・深谷・横山(事務局)で担当しました。「一人でお昼ご飯を食べるより、みんなで食べた方がいいのでは」「大会が初めての人は、どうやって楽しめばいいのか、事前にわかる方がいいかも」「大会

で出会った難しいことばや、わからないこと、モヤモヤすることについて、後で聞けるというのでは…」ということと、大会2日目お昼に対面で集まることにし、事前・事後のオンライン企画もすることになりました。

常任委員として担当した深谷さんがあつという間にチラシをつくり、事務局から「学生・院生」で申し込んでいる人にメールでお知らせしました。

事前にもオンライン企画を実施。越野委員長がスライドを準備して「ザ・全障研大会の楽しみ方」をレクチャーし、大盛り上がり。当日はなんと17名のわかものが集まり、自己紹介して、お昼をたべて、差し入れのおやつを楽しみました! 時間が足りないくらいでした。事後にもオンラインで集まり、学校の現状や発達保障について、深く語り合いました。

(副委員長 川地亜弥子)

「障害者問題研究」53巻1号を読む会

(特集／発達相談のしごとと相談援助) 7月18日

発達相談員は、仕事の内容も名称も、常勤か非常勤かも、地域によつてまちまちです。歴史的経過もきちんと振り返つて、心理主義的な傾向の強まりへの問題意識も反映しようと、企画されました。

参加者約50名を得た今回は、

は、大津市の発達相談員・西川志穂さんが話題提供しました。若い時に、乳幼児健診で早期発見して療育・加配になげようと力んでいたが拒否されるなど失敗もしながら、時間をかけてつながりお母さんの本音を引き出した経験。検査の数値だけで子どもをみるのではなく、障害と発達と生活をつねる視点を全障研などの学習の場で考え合い、ともに働く保健師や先輩職員や保護者からも学び、大津方式の大津といわれながら思うに任せぬ現実に対して、「ないものは創ればよい」と筋道を

見出していきます。

厳しい現実にも直面します。発達相談員が育つには、一人にしないでチームで取り組むこと、保護者や他職種や地域住民のつながりで支えられること、そしてそれを可能にする体制も大切です。

毎回の読む会に楽しみに参加している、率直な話がされていることに励まされる、との感想も寄せられています。また、鳥取支部は、支部の学習会に位置づけてグループで参加しました。

発達相談といわれるしごとと携わる全国各地の会員に読んでほしい特集です。

(全国事務局 梅垣美香)

■次回の読む会 ■53巻2号

「特集／知的障害・ボーダーライン知的機能の教育を拓く」

10月31日(金) 19時半〜21時

【話題提供】窪島務さん、田

部絢子さん
お申し込みはQRコードから。



障害者問題研究
53巻2号を読む会
参加申込フォーム

■計報

鈴木秀悦さん 7月12日、病のため死去。享年83歳。全障研岩手支部長、第22回岩手大会(1988)準備事務局局長として奮闘されました。遠野小学校長、釜石養護学校校長、旧前沢町教育長など歴任。

藤森善正さん 7月9日死去。享年88歳。全障研奈良支部元支部長。長年にわたり奈良教育大学教育学部附属中学校障害児学級を担任。

大迫より子さん 8月5日、病のため死去。享年73歳。全障研鹿児島支部元副支部長。小学校教員を経て「あすなろ療育相談室」を開設。麦の芽福祉会鹿児島子ども療育センター元園長。

新刊紹介

原田文孝

『私に人生と言えるものがあるなら』

全障研「みんなのねがい」誌の連載が本になりました。毎回、楽しみに待っていた読者もたくさんいたことでしょう。私もその一人でしたが、障害の重い子の担任経験がある私には「身につまされる」内容もたくさんありました。重症児施設で幼い頃から生きてきた佐藤さんは職員さんたちに触れられると大きな声で怒り、暴れていました。その「愛されべた」と見える姿の奥に「一人の人間として尊重してほしい」というねがいがあり、自らの名誉を守るた

めに怒っている、孤独の闘いを続けているのだと知ります。「愛されない」という覚悟をもった悲しみ、怒りなのだと捉え直します。障害の重い人たちには、時に「不適応」と呼ばれる行動がありますが、これを「覚悟をもった悲しみ」という倫理的価値をもって理解することで、教育は新たな扉を開きました。原田さんはその先に、あたたかいおしぼりで顔を拭き、ひげそりをし、鏡を見ながら、「男前になったなあ」と共感するという、心にしみ

る場面をつくり出しました。私は身につまされました。障害があり、思うような人生を送ることができず、結果として、人権の重要なものが損なわれている。人格のもつとも柔らかいものが傷つけられている。それをともに回復する過程として教育が成立している。美しい短編映画を見ながら、私もその仲間でありたいと強く願ったものです。

原田さんは学校教員を終えた後、「重度障害者通所事業所さち」の活動が続けています。障害の重い人と露天風呂に入ったり、サンマを焼いたり、坂道を滑ったりしています。ギターを持って歌う歌は1970年代のフォークソングです。私は苦しいことがあると、彼のそんな姿を想像することによって、「よし、がんばろう」と元気になっています。(京都支部 三木裕和)

8月8日(金) 9日(土)、全国委員会および総会を開催しました。

全国委員会

8月8日(金)に広島国際会議場会議運営事務室で全国委員会を開催し、24名の参加がありました。

全国委員会では、総会議案についての審議をおこないました。また、全国事務局局長および全国事務局員、出版部経営委員長・副委員長および出版部経営委員、研究推進委員長・副委員長および研究推進委員、『みんなのねがい』誌

ならびに『障害者問題研究』誌の編集長・副編集長および編集委員、発達保障研究センター長および研究委員を委嘱しました。

全国総会

議長 安藤常任全国委員、濱田全国委員

8月9日(土)、国際会議場会議運営事務室にて全国総会を開催し、約60人の参加がありました。2024年度

活動方針・決算・会計監査、2025年度の活動方針案・予算案、規約改正を承認・可決し、全国委員、会計監査を選出し、顧問を確認しました。いったん総会を中断し、第1回全国委員会を開催しました。

総会を再開し、第1回全国委員会を選出された委員長、副委員長、常任全国委員の紹介と顔合わせ、各種委員委嘱紹介がありました。

また、広島から第60回大会の開催を準備する滋賀への引き継ぎ式を行いました。

第1回全国委員会

第59期第1回全国委員会では、役員選考委員会の提案にもとづいて、全国委員長、副委員長、常任全国委員を選出しました。(第59期役員・委員は7頁に掲載)

(全国事務局員 櫻井宏明)



A5判 148ページ
定価 1980円(1800円+税)



全国総会 資料
<https://x.gd/Apa8v>

2025年度 第59期 役員、各種委員

下線_____は新

1) 全国委員

藤田明宏(北海道)	小淵隆司(北海道)	◎委員長 濱田健太(岩手)	△常任全国委員 斎藤 繁(山形)
鷲見俊雄(宮城)	鈴木順子(栃木)	栗山宣夫(群馬)	金室修平(千葉)
岡崎喜一郎(茨城)	○児嶋芳郎(埼玉)	山中冴子(埼玉)	△櫻井宏明(埼玉)
松元 巖(東京)	○河合隆平(東京)	△古澤直子(東京)	○蘭部英夫(東京)
△荒川 智(神奈川)	金澤園子(神奈川)	△塚田直也(神奈川)	太壽堂雄介(長野)
野口久子(新潟)	玉永真奈美(静岡)	△木全和巳(愛知)	伊藤修毅(愛知)
河村あゆみ(岐阜)	△別府 哲(岐阜)	辻 正(三重)	白石恵理子(滋賀)
松島明日香(滋賀)	山崎由可里(和歌山)	◎越野和之(奈良)	川合 桃(奈良)
△深谷弘和(奈良)	○丸山啓史(京都)	△石田 誠(京都)	△田中智子(京都)
高橋翔吾(大阪)	△安藤史郎(大阪)	木下孝司(兵庫)	○川地亜弥子(兵庫)
國本真吾(鳥取)	高橋 実(広島)	<u>藤井佳樹</u> (山口)	松本誠司(高知)
<u>上田優平</u> (愛媛)	瀧口直子(福岡)	田中一旭(大分)	西園健三(鹿児島)

2) 会計監査

松元 巖(東京) 軽部誠一(神奈川)

3) 顧問

清水 寛 藤本文朗

4) 全国事務局員

◎全国事務局長

梅垣美香 ◎櫻井宏明 社浦宗隆 鈴木こずえ 西口ひかり 横山園佳

5) 出版部経営委員

◎経営委員長 ○経営副委員長

河合隆平 川地亜弥子 ◎越野和之 ○蘭部英夫 櫻井宏明 児嶋芳郎 丸山啓史 社浦宗隆

6) 研究推進委員

◎推進委員長 ○副委員長

安藤史郎	石田 誠	狗巻修司	◎河合隆平	川地亜弥子	<u>河村あゆみ</u>	木全和巳	越野和之
○児嶋芳郎	小森淳子	佐々木将芳	白石恵理子	園部泰由	高橋翔吾	高橋 実	塚田直也
富井奈菜実	藤林清仁	古澤直子	松島明日香	松本誠司	丸山啓史	深谷弘和	三木裕和
山中冴子							

7) 「みんなのねがい」編集委員

◎編集長 △編集部員 * (支部) 名前の順

(北海道) 大橋伸和・柴田久美子・島 由佳・瀧澤颯大・田中雅子、(岩手) 濱田健太、(宮城) 岡野圭奈・小山紗知・渡邊紀子、(福島) 千葉真実、(茨城) 若林陽子、(群馬) 吉村邦造、(埼玉) △芝崎芽久実・若山健太・金子昭代・△児嶋芳郎、(千葉) △鈴木希世佳・瀧川恵里子・村瀬智弘、(東京) △大和田章・△神野 愛・澤佐景子・鈴木文晴・丸田加奈・高梨恵子、△古澤直子、(神奈川) 加藤 恵・河相美和子、◎塚田直也、(山梨) △中村美知代、(長野) 下田有輝、(新潟) 佐藤 陽・田邊陽子、(石川) 長沢育子、(静岡) 二橋宏美、(愛知) 須田哲生・竹沢 清・寺部佳代子、(岐阜) 寸田純子・土岐邦彦・丹羽美名、(三重) 辻 和美・畑中美明、(滋賀) 岡田徹也・木澤愛子・坂口賢洋、(京都) △塩田奈津・松本和剛、岡部 茜、(大阪) 井関美季・松本将孝・安田 薫、(奈良) 小針康子・末長詩織、(和歌山) 飯 博美・山本翔太、(兵庫) 小林晴美・中村好孝・早川一穂・原田文孝、(岡山) 川野吏恵・田辺昭夫・檀上貴史、(鳥取) 澤田淳太郎・内藤綾子、(広島) 秋保喜美子・神谷さとみ・南家孝之、(山口) 小林 梓、藤井佳樹、(高知) 池澤美樹、(愛媛) 高岡幸子、(福岡) 敷島篤子、(鹿児島) 黒川久美・前野美智代、前原真奈美、(沖縄) 羽地知香・比嘉慈美

8) 「障害者問題研究」編集委員

◎編集委員長 ○副委員長

○ 荒川 智	井原哲人	<u>金丸彰寿</u>	○ 河合隆平	川地亜弥子	河原紀子
楠 凡之	栗山宣夫	越野和之	児嶋芳郎	白石恵理子	白石正久
<u>竹脇真悟</u>	田中智子	土岐篤史	<u>戸田竜也</u>	服部敬子	濱畑芳和
藤林清仁	深谷弘和	◎細淵富夫	丸山啓史	山中冴子	山本 忠

9) 発達保障研究センター

センター長＝児嶋芳郎

研究員＝常任全国委員

教育と保育のための 発達診断セミナー

2025年11月30日(日) 13:00~16:40

オンライン ライブ(見逃し配信あり)

本セミナーは、2009年から全国各地で開催し、好評を得てきました。現在は年2回、全国どこからでも受講できるオンラインセミナーとして開催しています。「発達について学びたい」「障害があるってどういうこと?」「よりよい実践をつくりたい」など、保育・療育、教育、福祉に携わるあなたの切実な声に応えます。

プログラム



(1) 乳幼児期の療育と発達

乳幼児期の療育(児童発達支援)において、子どもの発達理解の大切さを事例を通して考えたいと思います。行動の奥にある子どもの発達への願いを職員や親が共通して理解していくなかで、子どもは周りの大人への信頼感を確かなものにしていきます。(テキスト上巻V-1章)

高橋真保子さん(社会福祉法人コスモス 発達相談員)



(2) 遊びと発達～ライフステージを一貫する遊びの発達の意義

子ども時代に「われを忘れて」楽しいことやおもしろいことに熱中する遊び経験に満ちていることは、その後の人生も豊かに支えていきます。「忘れられた権利」と言われてきた「遊ぶ権利」をすべての子どもに保障する手だてや条件について研究と実践から学んできたことをお話しします。

(テキスト上巻Ⅱ、Ⅲ-2~4章、下巻Ⅱ-6章)

服部敬子さん(京都府立大学)



(3) 学童期の発達と実践

学童期には保護者のいる家庭、先生のいる学校とともに、子ども同士でつくる「第3の世界」が大切になります。ゆたかな学校教育とともに、子ども同士で遊ぶことを権利として保障したいものです。放課後の生活にも目を向けつつ、発達の子ども理解について、実践をもとに深めていきます。

(テキスト上巻Ⅱ、Ⅲ-4章、V-2章)

川地亜弥子さん(神戸大学)

こんなセミナーです～前回セミナー参加者の感想から～

●乳児期後期の発達について、具体的に説明をしてくださいました。自分が今関わっている障害者の発達の様子と重ね合わせ、どんな声かけが必要かを考えながら聞いていました。

●思いを言語化し、思いをわかって代弁してもらい、どう表現していくかに気づく、相手の気持ちにも気づいていく。内面の育ちの大切さを感じました。

●1歳半の発達の特徴が「…ではない～だ」という気づきにあることが理解できました。気づいていくプロセスを大切にしていくことを積み木の課題やはめ板の課題を通して理解できました。

参加費

一般	●5,000円
全障研会員	●3,000円
学生・障害者	●2,000円

参加申し込み受付期間

9月1日(月)～11月20日(木)

QRコードまたはURLからアクセス
<https://form.run/@20251130>



共催 NPO 法人 発達保障研究センター／全国障害者問題研究会

問合先 NPO 法人 発達保障研究センター TEL 080-4332-2601 土日休日除く9時～17時

メール s2025@nginet.or.jp ウェブサイト www.nginet.or.jp

〒162-0801 東京都新宿区山吹町4-7 新宿山吹町ビル5F 全国障害者問題研究会 内